

茶碗や皿、漆の器など、工芸は私たちの日常の中でも使われ、なじみ深いように思われるが、いざガラス越しに展示されている作品を鑑賞する、となると身構えてしまう方も多いのではないだろうか。教

養が無いから見方が分からない、という声は工芸の鑑賞でもよく聞かれる言葉である。特に工芸ではやきものひとつをとってみても、備前や志野といったある地域で発達した様式、そしてそれを支える、染付・上絵・色絵など数多くの技法があり、その技法を知らない作品をよく鑑賞することが出来ない、といった声も聞かれる。確かに、技法を知っていた方がより深い鑑賞をすることが出来るのかもしれない。しかし、鑑賞を楽しむ方法はそれだけにとどまらないのではないだろうか。

工芸館では展覧会会期中の水・土曜日に「タッチ&トーク」という教育プログラムを行っている。このプログラムでは、目や手、音やにおいなど五感を活用して作品鑑賞を楽しんでもらうことを目的としており、人間国宝から若手まで、さまざまな作家が作り上げた作品を実際に手にとって鑑賞することができる。近年多く行っている学校団体の受け入れや子ども向け

鑑賞プログラムの際にもこれを応用し、初めて工芸を鑑賞する子どもたちでも楽しんで鑑賞ができるよう、内容を工夫している。

団体の受け入れや子ども向けプログラムを行っている中で、細かな技法などは恐らく知らないであろう子どもたちが実際に生き生きと作品と向き合い、鑑賞を深めていく姿をこれまでに数多く目にしてきた。その中でも、彼らの観察眼の鋭さや、作品から本質を感じとる力の高さに驚かされることもある。例えば、轆轤で形を作ったやきものの作品を鑑賞したある女の子は、まるでその回転運動を体験するかのように手を器の内面に沿ってぐるぐる回しながら鑑賞をしていた。他にも、吹きガラスで作られた作品の口の部分に思わず口をつけてしまう子どもや、乾漆でつくられた作品をお面のようにかぶる子どももいる。このように子どもたちは、自然とその形や手ざわりなどから作品の作られ方や成り立ちを感じとっているのではないか、と思うことがしばしばある。子どもたちの反応から必要に応じて作品についての情報提供をすることもあるが、必要以上には提供せず、子どもたちの発言

や発見・鑑賞の際の動きに紐づけたものになるようにしている。

作品とむきあい、じっくりと鑑賞し、そこから気になったことを深めていく。感じたことをヒントに鑑賞していく。ファシリテーターとともに鑑賞する、など工芸には子どもに限らず、来館者一人一人にとって様々な鑑賞の楽しみもあるのではないかと思う。本稿では、二〇一六年の夏に行った「キュレーターに挑戦!」、「陶芸ワークショップ」という二つのイベントを報告しながら様々な工芸鑑賞の可能性を考察する。

「キュレーターに挑戦!」

「キュレーターに挑戦!」は文字通り、子どもたちにはなじみが薄いかもしれないキュレーターという職業に挑戦してみよう!という試みである。ここでは、ただ仕事体験をするのではなく、その挑戦を通してよりよく作品を鑑賞する、ということを目指としている。

対象は小学四年生〜中学三年生で、今回(八月五日)は二十名の子どもたちが参加した。まずはアイスブレイクとしてアトカードで「にたものつながりゲーム」を行った。このゲームはそれぞれ手札を五枚

ずつ持ち、場に出ているカードと似ている部分を見つけ、それを他の参加者に説明し、全員が納得すると場にカードを出すことが出来るというゲームである。このゲームではカードをよく見て、描いてあることや造形要素などから類似点を見つけていることが特に重要である。

次にグループごとに一点作品を鑑賞した。今回は染織・磁器・ガラスの作品を鑑賞した。グループには一人ずつファシリテーターが付き、鑑賞をサポートする。まずはさわらずにじっくりと鑑賞し、その中で気になったことをファシリテーターや参加者間の対話を通して深めていく。その後、実際に作品を手にとって鑑賞し、そこから新たに気がついたことを話したり、見ていた時に気がついたことを確認したりしながら作品研究を進めていった。初めの鑑賞では手ざわりや重さ、素材や技法などを想像しながら鑑賞を進めたが、その上で実際に作品を手にとって鑑賞した子どもたちは、自然と想像していたこととの違いや、想像通りであった点を比較しながら鑑賞していた。また、作品研究ということで、後半に行ったファシリテーターによる必要に応じた情報提供からも鑑賞を深

めている様子であった。

キュレーターにとっては、作品をじっくり鑑賞し、研究することはもちろんのこと、その魅力を人に伝えていく、という点が重要である。そこで、作品をじっくり鑑賞した結果、一番伝えたい部分はどこなのか考え、そのことが伝わるように工夫をしながら写真を撮影し、それをういて作品カードを作成した。

上原美智子の《ショール》という作品(染織は、精練されていない絹糸を用いた織物で、私たちが絹といわれて想像するものよりも張りがあり、かつ空気の形をとどめておけるかなのようなしなやかさがある。そのことを伝えたいと思ったある女の子は、ショールをふんわりと置き、張りがあがしなやかに見えるように工夫し、写真を撮った。[図1]

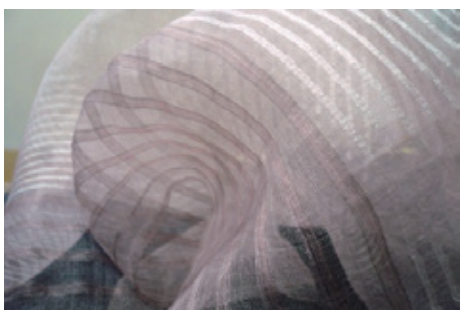


図1 参加者が撮影した上原美智子《ショール》

同じ作品を鑑賞していても、注目するポイントとは人それぞれで、作品カードに書かれたコメントや絵、そして最も伝えたい点はきちんと作品と向き合い撮られた写真に写っており、個性豊かな様々な視点からとらえられた作品カードが完成した。[図2]

次は展示室に行き、「ナニデキテルノ？」展(七月十六日〜九月八日開催)の担当者から、どのように展示を構成したのか、どんな作品があるのかを聞きながら作品を鑑賞し、展示室にある作品と先ほど作品カードを作成した作品を一緒に展示するとしたらどこにどのように展示したいのかを考えた。いきなり展示プランを考えることは難しいことだが、初めにアートカードで行ったように、似ているものを探してみようといった声かけや、むしろ正反対のものはどれかな? など作品に表現さ



図2 参加者が制作した上原美智子《ショール》の作品カード

れていることや造形要素などをよく観察しながらプランを考えてみるよう声かけをした。

ある女の子は「やさしいもの」というテーマで展示プランを考えた。見どころは「明るい色」。彼女にとってやさしいものというのはつまり、明るい色のものであったようだ。また、ある女の子のテーマは「雪の作品」で、見どころは「白」というところが共通している。確かに共通点は白なのだが、作品自体をよく見ていくと、雪のように見える点が作品にちりばめられていたり、雪の結晶のような模様だったり、色々なところから雪の要素を探し出すことができるプランであった。[図3]

選ぶ作品や、展示したい場所、どのよう

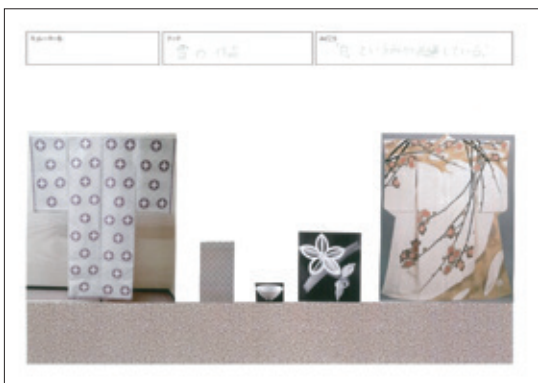


図3 参加者による展示プラン。テーマは「雪の作品」

なテーマにするかなど、展示プランを考える際には様々な要素があり、人によってどこに重点を置くかも様々であった。プログラムの最後には、制作した作品カードと展示プランを、お互いに対話をしながら分析した。そのことにより、視点の違いや新たな見方に気がつき、改めて作品について考え、深く鑑賞するきっかけとなった。今回のプログラムでは一人一人がそれぞれの視点で作品と向き合い、それを人に伝える、表現する、そして様々な人の視点や見方を知る、ということを通して、鑑賞を深めているようであった。

「陶芸ワークショップ」

制作ワークショップは毎年テーマを変えながら続けてきたもので、二〇一四年は「沈金ワークショップ」、二〇一五年は「鍛金ワークショップ」を行った。どれも専門的でなかなか一般には体験できない技法であり、特に子どもが体験する機会に恵まれにくいものである。二〇一六年は陶芸家室伏英治氏を講師に迎え、磁器練込を体験する「陶芸ワークショップ」を行った。これまでも陶芸のワークショップは何度か行っているが、いずれも陶器をあつかったもので、磁器は工芸館としても初めての試みであった。

今回(八月八日)の陶芸ワークショップでは、小学四年生から中学二年生までの二



図4 陶芸ワークショップでの制作の様子

十名が参加した。まず展示室で室伏氏の作品を鑑賞した後、磁器練込や、大まかな作り方を学び、全員で制作前の体操を行った。この鑑賞や体操などを経て緊張した面持ちの子どもたちの表情が少しずつほぐれていくようだった。その後、うろこ模様、小花模様、バラ模様に分かれ制作を行った。やわらかな磁器粘土を延ばしたり切ったり、模様になるように集めたりしながらそれぞれの模様が散った丸く分厚い状態を作り、最後にはそれを三枚にスライスし同じ模様のお皿が三枚完成した。「図4」制作中、子どもたちは磁器粘土のやわらかさを体感するかのようにリズムをとりながら粘土を延ばしていた。その様子はあたかもやわらかさを作品そのものに封印しているかのようにもあり、それは陶器の粘土では起こらなかった体の表現



図5 陶芸ワークショップで仕上がった作品

であった。磁器練込は色の異なる粘土を組合せているため、乾燥や焼成時に割れやひびが生じやすく、室伏氏自身も安定した制作を出来るようになるまでには苦労をされたとのことであるが、今回は講師も驚く程の完成度の高さであった。「図5」制作ワークショップでは、自分で制作の工程を体感することで、より鑑賞を深めることを目的としている。陶芸ワークショップの日にも、制作を終えたある男の子が、改めて室伏氏の作品を鑑賞し、模様の成り立ち、形の理由、そして磁器の透光性など様々なことに気がつき、初めてみた時に感じたことをより深めている様子であった。また、後日、完成した作品を引き取りに来たある家族は、自身の作品を見て驚き、子どもは自然と母親にどのように作ったのか、どのくらい土がやわらかかったのか、光に透ける性質があること、練込なので表と裏は同じ模様になっている、などといったことをとても嬉しそ

うに生き生きと話していた。陶芸ワークショップ以外でも、子どもたちが作ったものや見たことについて保護者や周りの人に自身がフアシリテーターとなって話している様子を目にすることがある。子どもたちにとって鑑賞を深めるということは、じっくり観察・鑑賞するだけでなく、鑑賞したことを聞き届けてもらったり、他の人と共有したりといった事でも深められているのかもしれない。

今回報告した二つのプログラムはどちらも対象年齢が小学四年生〜中学三年生であり、一見すると「キュレーターに挑戦！」は鑑賞、「陶芸ワークショップ」は制作、と分かれているように見える。しかし、「キュレーターに挑戦！」では、鑑賞をメインに据えながら、写真撮影をしたり、作品カードを作ったり、展示プランを考える、といったクリエイティブな要素が多くあり、「陶芸ワークショップ」では制作を通して同じ技法で作られた作品の鑑賞が深まったり、その他の技法で作られた作品に対しても、どのように作られたのかといった、鑑賞を深める疑問がわいたりなど、どちらも鑑賞と制作・創造の両面を併せ持ったプログラムであった。アプローチこそ異なるが、どちらも参加した子どもたちが作品のことを考えたり、じっくり観察したり、実際の制作工程を体験しながら

作品について考える、といった自発的な行為を通して鑑賞を深めていくことにつながった。

今回は子どもの例を報告したが、大人であっても「タッチ&トーク」の際に、ガイドスタッフと一緒に鑑賞することで、知らなかった見方に気づいた、他の人と一緒に鑑賞することも面白い、といった意見を耳にすることもあった。今後も、プログラムの見直しや新たな企画を通して、様々な工夫鑑賞の可能性について探っていく。

(工芸課研究補佐員)

次号予告 2017年4月1日刊行予定

現代の眼 623

On view

茶碗の中の宇宙 樂家一子相伝の芸術

マルセル・ブロイヤーの家具：improvement for good

Review

endless 山田正亮の絵画

2016年2月1日発行(隔月1日発行) 現代の眼 622号

編集：独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館／美術出版社

制作：美術出版社

発行：独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館

〒102-8322 東京都千代田区北の丸公園3-1 電話03(3214)2561

表紙：尾竹竹坡 上段右より《風精》《銀河宇宙》《火精》《流星》下段右より《宝の番人》《天下廻り持》《失題》いずれも1920年 絹本彩色・軸 123.5×40.5cm 東京国立近代美術館蔵

MOMAT支援サークル

木下グループ 三菱商事 鹿島建物 Marubeni

パシフィックコンサルタンツ JEOL 日本電子株式会社 SEIKO